

障害学生支援に関する授業担当教員アンケート調査

(平成 28 年度)

1. 実施の背景と目的

平成 27 年 8 月に従来の「障害学生支援室」から「障害学生支援センター」へと発展・拡充し、1 年が経過した。このような状況の中で、今後の障害学生支援の充実のための課題や方向性を検討するため、障害学生が受講する授業担当教員へ障害学生支援についての現状や意見、障害学生支援センターの取り組みの有効性についてアンケート調査（資料 5）を実施した。

2. 方法

平成 28 年度前期・後期において本学で開講された授業のうち、障害学生が受講した授業の担当教員 77 名（常勤 54 名、非常勤 23 名）を対象に、2017 年 1 月～2 月にかけて、郵送法にてアンケート調査への回答を求めた。そのうち、31 名から回答が得られた（回収率 40%）。なお、回答者は常勤教員 16 名、非常勤講師 15 名であった。

3. 結果および概要

各質問項目の結果は以下の通りである。

問① 担当した授業（障害のある学生が受講した授業）について

担当した授業において障害のある学生の障害種（複数回答）を尋ねたところ、視覚障害 31 件、聴覚障害 51 件、肢体不自由 2 件、病弱・虚弱 2 件、発達障害 3 件、精神障害 3 件、不明 7 件であった。本年度は視覚障害学生および聴覚障害学生に対する支援件数が 82 件と、全体の 81%を占めていることが分かる（図 3-1）。

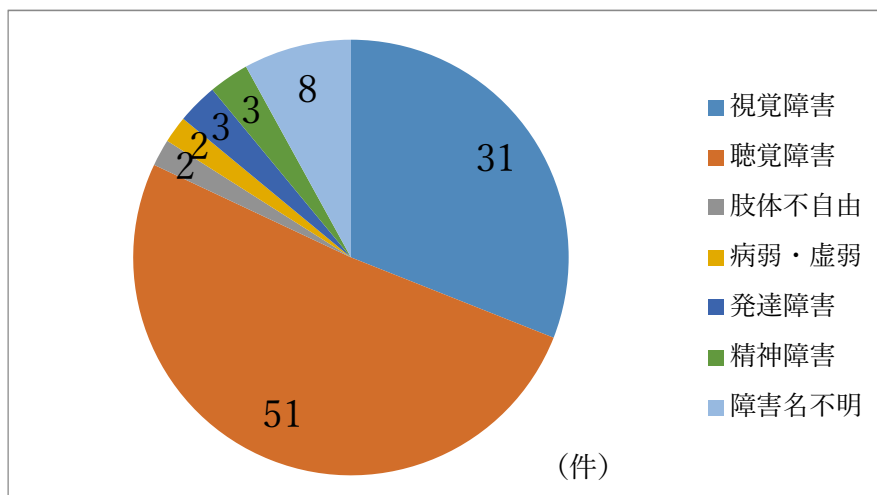


図 3-1 支援件数

授業を担当している障害学生へ行った配慮について、今まで行ったことがあるものすべてを選択するよう求めた結果を図 3-2～図 3-8 に示す。

視覚障害学生への配慮として「教材の拡大（14件）」が最も多く、「教材のテキストデータ化（7件）」が続いた。

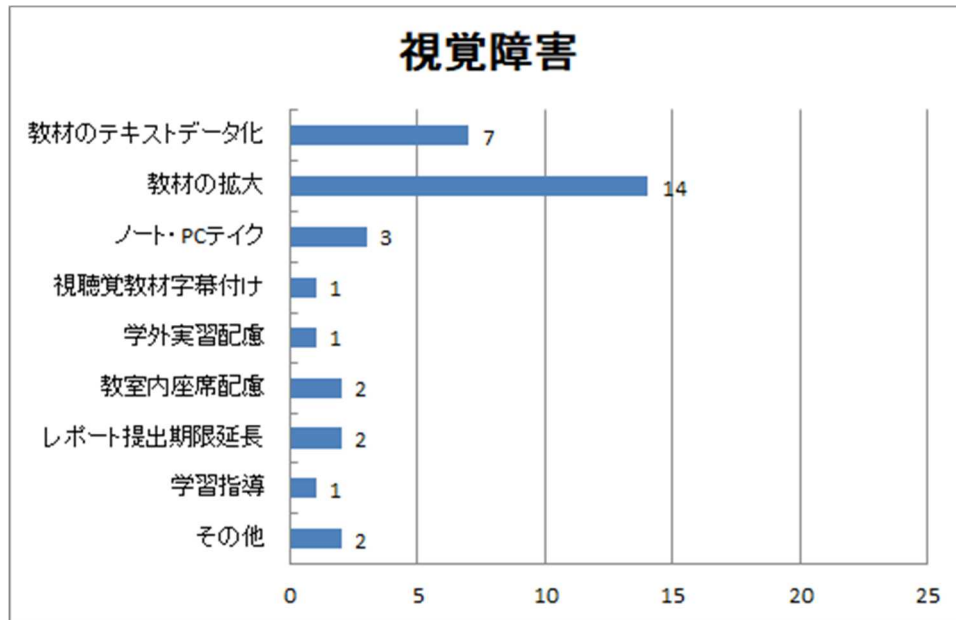


図 3-2 視覚障害学生に行った配慮

聴覚障害学生への配慮では「ノート・PCテイク（22件）」が最も多く、続いて「視聴覚教材への字幕挿入（8件）」であった。

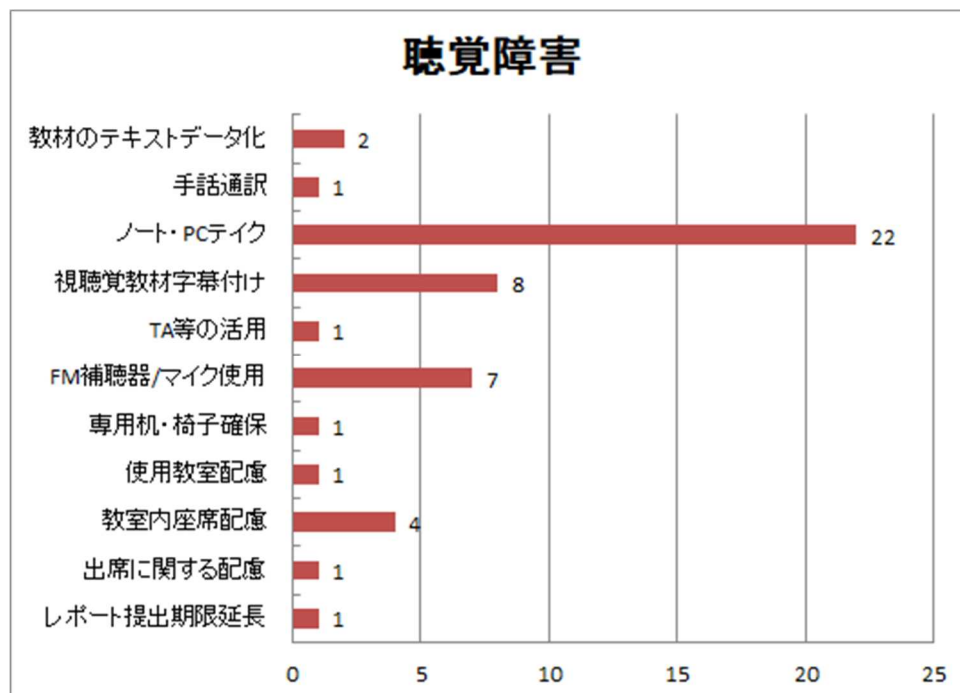


図 3-3 聴覚障害学生に行った配慮

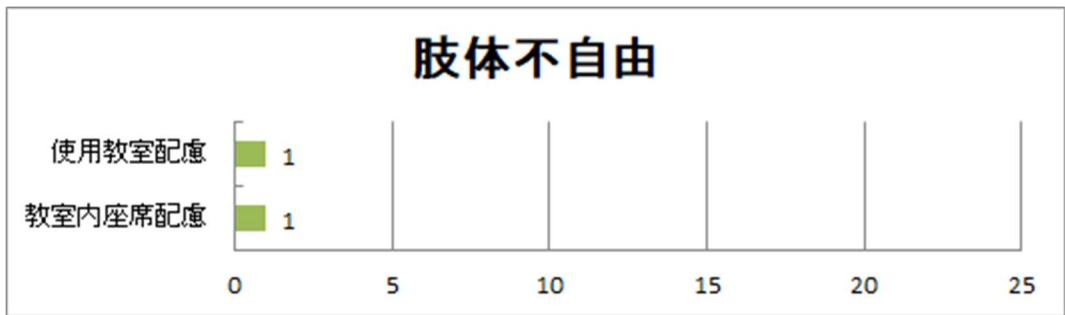


図 3-4 肢体不自由学生へ行った配慮

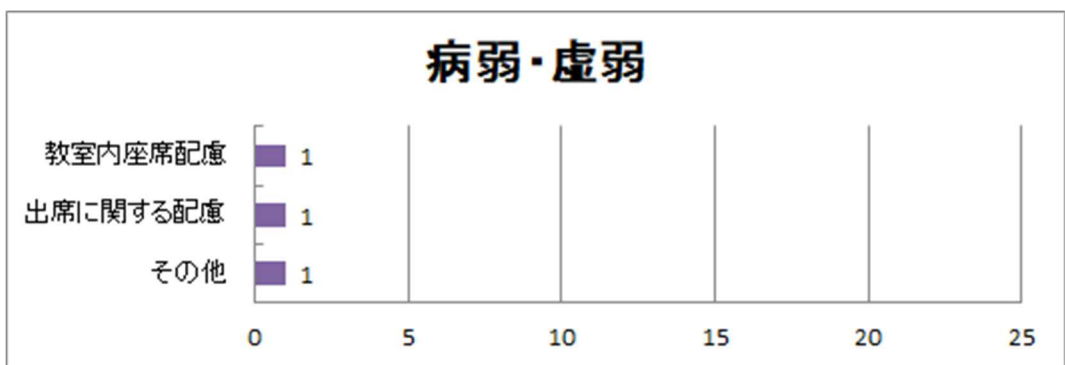


図 3-5 病弱・虚弱の学生へ行った配慮

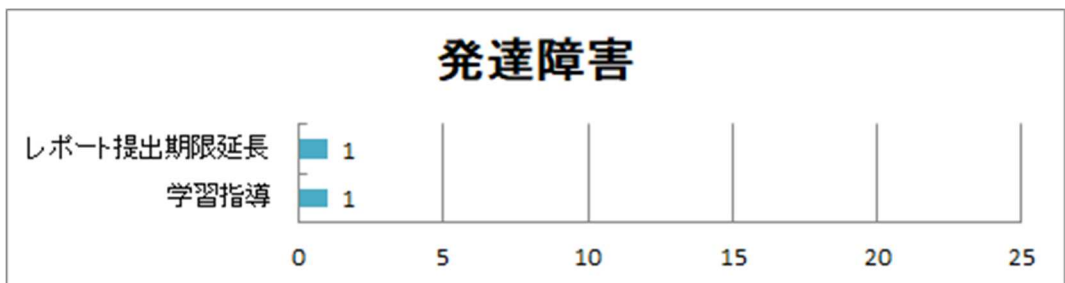


図 3-6 発達障害学生へ行った配慮

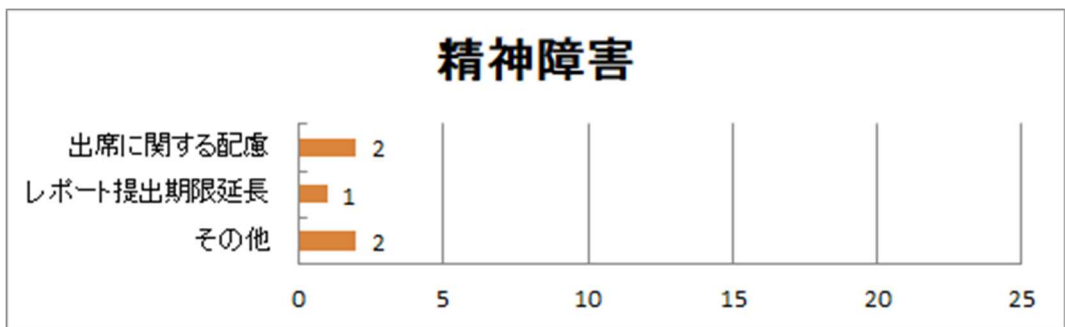


図 3-7 精神障害学生へ行った配慮

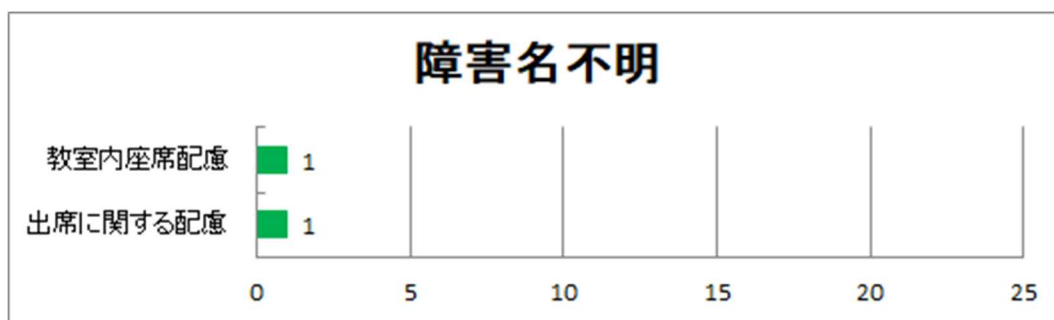


図 3-8 障害のある学生（障害名不明）へ行った配慮

なお、すべての障害種における配慮の中で、「ノート・PC テイク」が昨年度同様、本学において最も件数が多かった。「視聴覚教材字幕付け」は、聴覚障害学生への配慮のうち、昨年度は 8 件中 5 位であったものの、今年度の調査では 2 位となった。学期開始前に授業担当教員に配布する配慮願い等で案内を行ったことで、授業担当教員の字幕挿入の必要性への理解が高まったことなどが考えられる。

問② 障害学生支援センターが提供している支援（パソコンテイク、字幕挿入、情報提供等）は適切であったと思いますか。

上記について尋ねたところ、図 3-9 のような結果が得られた。回答者全体では、「とてもそう思う」が 17 名、「少しそう思う」が 9 名で、すべての回答者が肯定的な回答を行っており、障害学生支援センターで行われる配慮に一定の評価が得られたと考えられる。その一方で、表 3-1 に示した自由記述に「障害学生と同課程の下級生が翌年受講する専門科目のテイクを担当するのは望ましくない」とあるように、支援学生の登録数等の影響も大きいものの、PC テイカーの学年を考慮した配置についても検討していく必要がある。

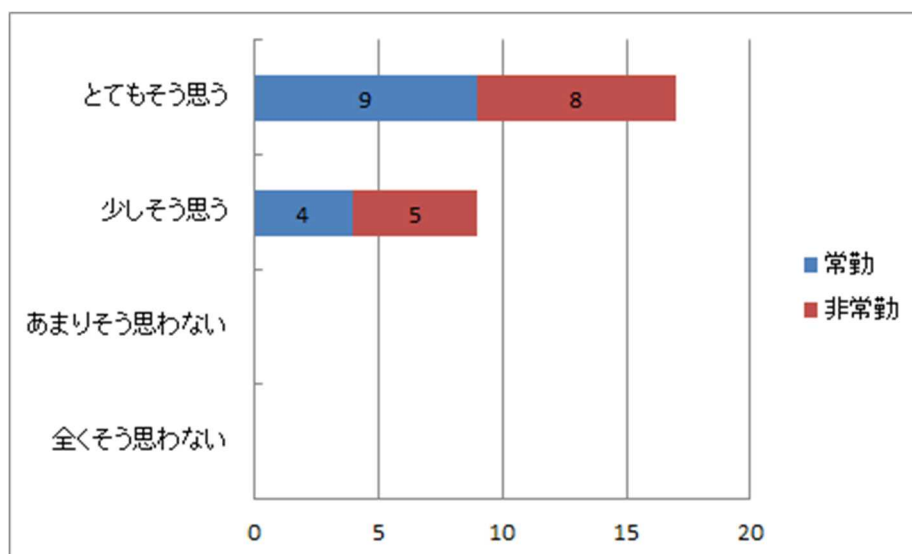


図 3-9 問②の結果

問③ 障害のある学生への配慮は、授業の達成目標という観点から見て十分だと思いますか。

上記について尋ねたところ、図 3-10 のような結果が得られた。回答者全体では、「とてもそう思う」が 15 名と最も多く、次いで「少しそう思う」が 11 名であった。これらの結果より障害学生支援センターで提供する配慮は、授業の目標を達成するために十分なものであったと推測される。

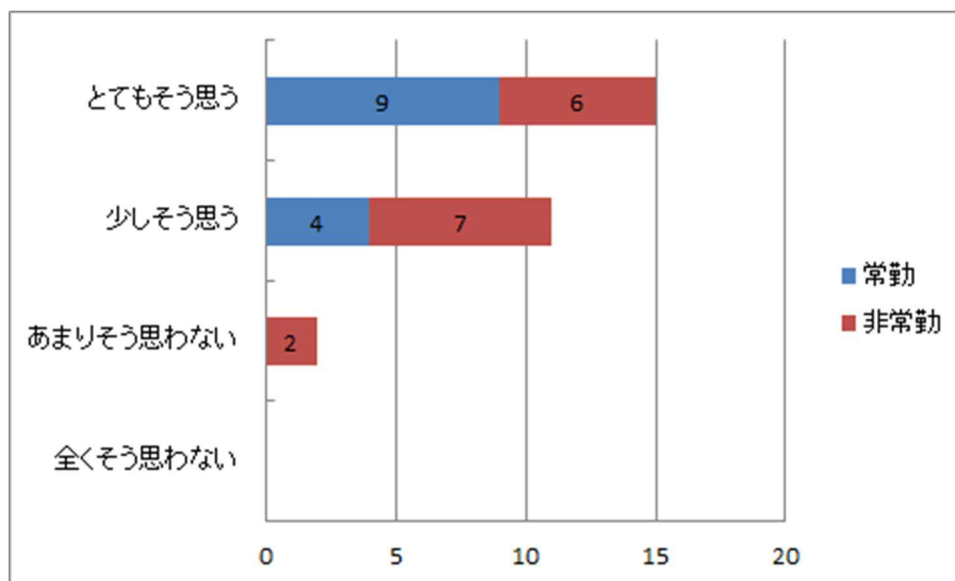


図 3-10 問③の結果

問④ 障害のある学生に授業を行うことで、授業のユニバーサル化が進んだと思いますか。

上記について尋ねたところ、図 3-11 のような結果が得られた。回答者全体では、「とてもそう思う」が 6 名、「少しそう思う」が 13 名であった一方、約 3 割が「あまりそう思わない (9 名)」と回答しており、誰にでもわかりやすい授業作りに関する FD 研修等を充実させる必要性が示唆された。

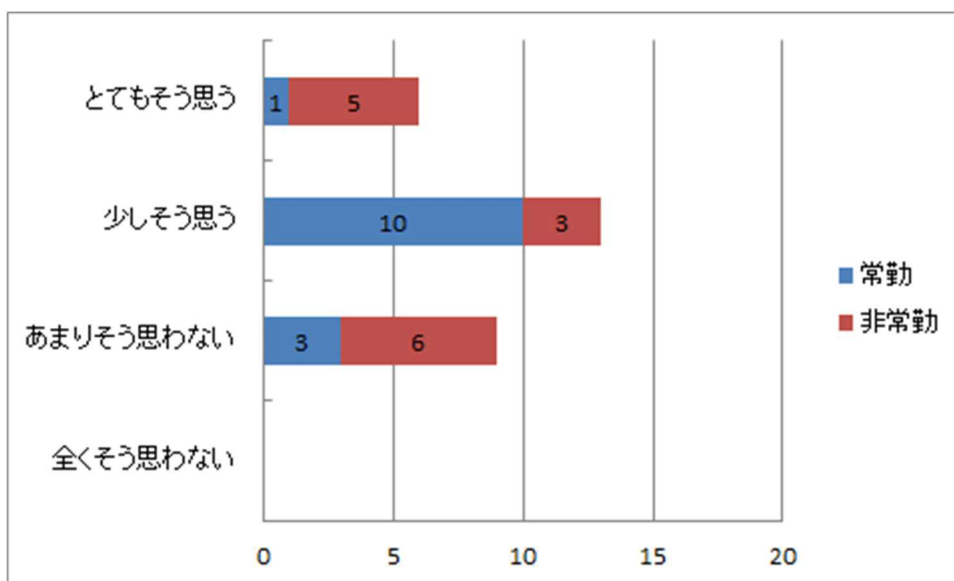


図 3-11 問④の結果

問⑤ 障害のある学生へ授業を行っていく上でFDが必要だと思いますか。

上記について尋ねたところ、図 3-12 のような結果が得られた。回答者全体では、「とてもそう思う」が 6 名、「少しそう思う」が 15 名であり、授業担当教員は FD の実施を求めていることが明らかとなった。

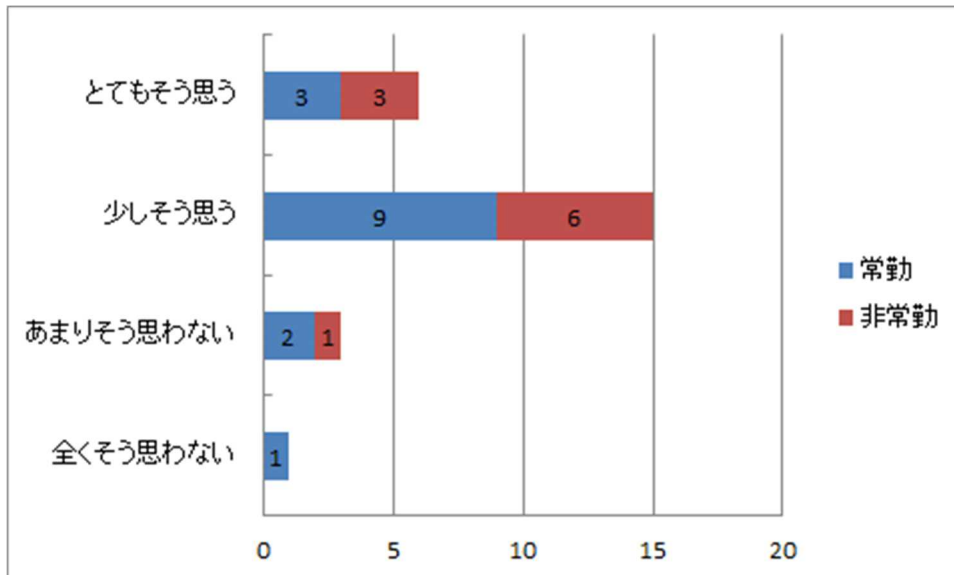


図 3-12 問⑤の結果

問⑥ 障害のある学生への支援を行うにあたって上手くいかなかった授業について、その頻度を一つ選んでください。

上記について尋ねたところ図 3-13 のような結果が得られた。「たまにあった」と回答した人数が最も多く、次いで「全くなかった (12 名)」が続いた。表 3-1 の自由記述に「グル

ープディスカッション、学生によるプレゼン時に、「テイクが追いつかないケースがみられた」とあり、アクティブラーニングを取り入れた講義が増加することも予想されるため、ディスカッション形式での授業の際の配慮点を教員や支援学生に伝える必要性が示唆された。

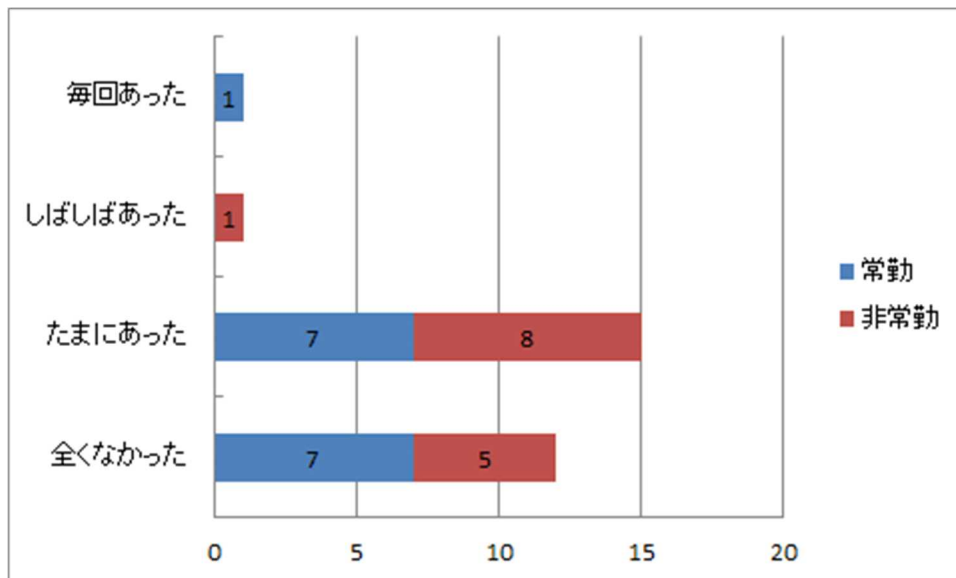


図 3-13 問⑥の結果

問⑦ 障害のある学生が自分の必要な配慮事項について、能動的に先生方に伝えたいと思いますか。

上記の問いに対して、図 3-14 のような結果が得られた。「あまりそう思わない」が 15 名と最も多く、次いで「少しそう思う (11 名)」であった。大学在学時はもちろん、卒業後には自ら積極的に援助要請を行うことが必要であると考えられる。そのため学生自身が周囲に配慮事項を伝えられるように指導していくことが求められる。

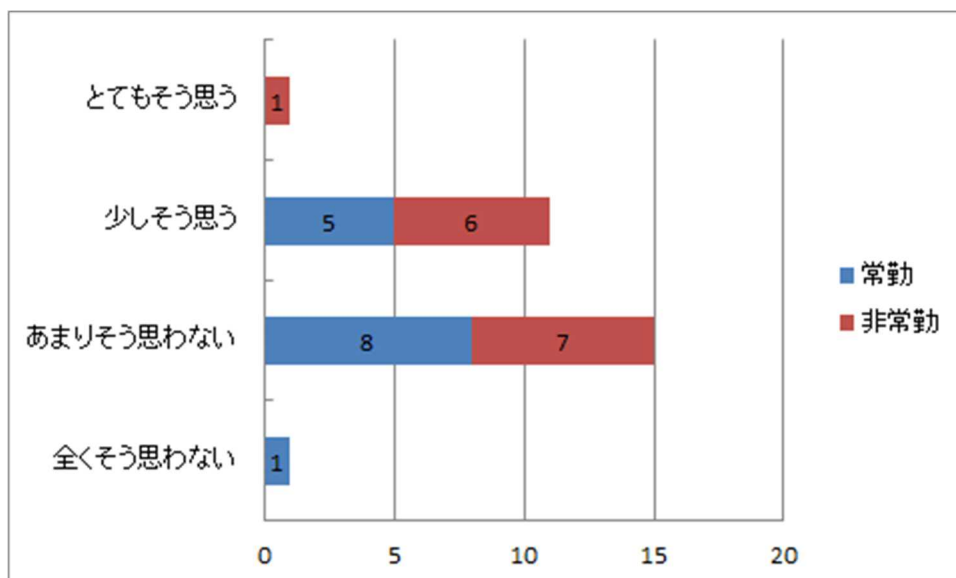


図 3-14 問⑦の結果

問⑧ 障害学生支援センターより送付した、障害のある学生への配慮依頼文書は十分に理解されましたか。

上記について尋ねたところ、図 3-15 のような結果が得られた。「とても思う」と回答した教員は 14 名、次いで「少し思う」が 13 名であり、配慮依頼文書は理解されていた。その一方で、「あまりそう思わない」と回答した教員も 2 名おり、文書による配慮依頼だけでなく、適宜口頭による説明を行う必要性が示唆された。

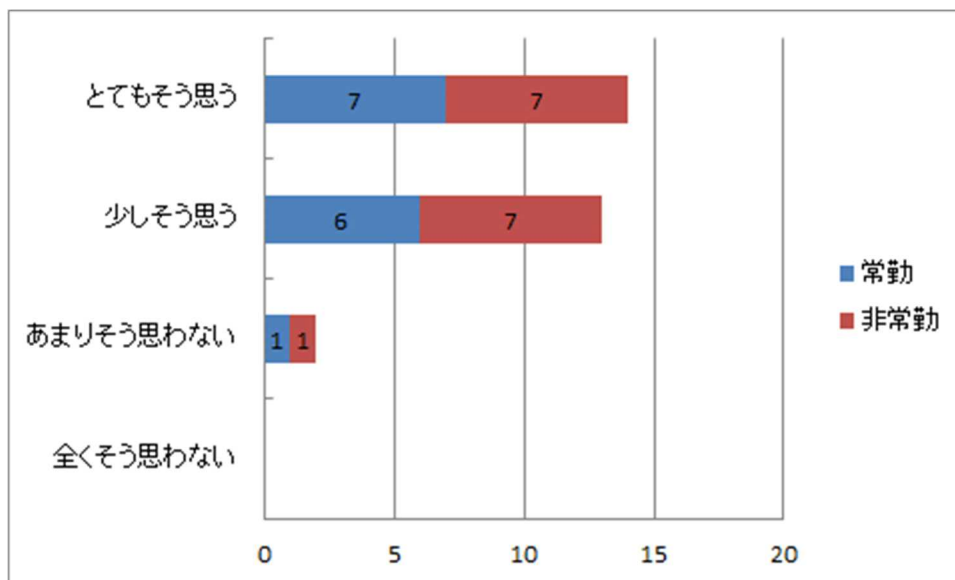


図 3-15 問⑧の結果

表 3-1

問② 障害学生支援センターが提供している支援は適切であったと思いますか。

- ・ 障害学生と同課程の下級生が翌年受講する専門科目のテイクを担当するのは望ましくない。
- ・ 聴覚障害学生には、ノートテイク、字幕は有用。(2名)
- ・ 事前の準備が間に合わず、字幕挿入ができなかったので動画を使用しなかった。

問③ 障害のある学生への配慮は授業の達成目標という観点から見て十分だと思いますか。

- ・ 授業後に、個別確認(指導)がなかなかできなかった。
- ・ ゆっくり時間が取れないため、他の学生との時間差が生じてしまう。
- ・ プリントを多く多用するようにした。

問④ 障害のある学生に授業を行うことで、授業のユニバーサル化が進んだと思いますか。

- ・ 視聴覚教材への字幕挿入は留学生からも要望があったのでよかった。
- ・ 障害学生自身が努力しているので、授業は普通に行えた。
- ・ 動画の字幕挿入は一般の学生の理解も促すことができた。
- ・ 授業のペースをゆっくりにするように心がけた。
- ・ 板書の文字などで、十分な配慮ができなかった。

問⑤ 障害のある学生へ授業を行っていく上で、FDが必要だと思いますか。

- ・発達障害の認識を深める必要があると感じた。
- ・学生からの評価がほしい。
- ・個人で必要な対応が異なるため、必要性を感じない。
- ・友人による支援があったため、必要性を感じない。

問⑥ 障害のある学生への支援を行うにあたって上手くいかなかった授業について、その頻度を一つ選んでください。

- ・グループディスカッション、学生によるプレゼン時に、テイクが追いつかないケースがみられた。
- ・支援学生不在の際の指導。
- ・クラスの学生への啓発も必要だと感じた。
- ・当日追加したい内容がある場合が難しかった。
- ・時間配分が難しかった。
- ・鑑賞は聴覚障害学生には難しいと感じた。
- ・プリントには書いていない余談をつい入れてしまう。

問⑦ 障害のある学生が自分の必要な配慮事項について、能動的に先生方に伝えたと思いますか。

- ・授業のオリエンテーション時に、よく話し合えた。
- ・毎回実施する10分ほどの小テストも問題なく、障害を感じさせなかった。
- ・伝えられた記憶はなく、必要性も感じなかった。
- ・ニーズがよくつかめなかったため、あまりそう思わない。

問⑧ 障害学生支援センターより送付した障害のある学生への配慮依頼文書は十分に理解されましたか。

- ・ややわかりにくい箇所もあった。
- ・授業が前期の早い時期だったので、依頼文書が直前に来て、準備が間に合わないことがあった。

問⑨ 障害のある学生への支援を行うにあたって、工夫した点について記述してください。

障害種別にまとめたものを表3-2に示す。「情報を簡潔に伝えるため、文字数を減らしたプリントを使うようにした」、「メモを取る時間と説明する時間を分けた」、「グループディスカッションの際に、テイクが声を拾いやすいように、机の位置を配慮した」というように配慮依頼文書に記載している配慮点に加え、授業を行う中で有効だと考える手立てを担当教員が行っていることがうかがえる。それぞれの教員が行っている工夫を蓄積していきフィードバックすることで、より効果的な配慮、分かりやすい授業づくりにつながると考えられる。

表 3-2 支援を行うにあたって工夫した点

視覚障害	
資料・教材について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 配付資料の拡大。(4名) ・ 情報を簡潔に伝えるため、文字数を減らしたプリントを使うようにした。(2名)
授業の進め方について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本人の障害受容がどの程度あるかが不明だったため、内容や言葉遣いに注意した。 ・ 板書の文字を大きく書くようにした。(2名)
レポートについて	<ul style="list-style-type: none"> ・ 音声入力パソコンで記述してもらい、メール添付で提出してもらうようにした。
聴覚障害	
話し方について	<ul style="list-style-type: none"> ・ ゆっくりと明瞭に話すようにした。(8名) ・ 板書が終わってから話す等、学生の方を向いて話すようにした(2名)。
資料・教材について	<ul style="list-style-type: none"> ・ プリントやスライドを活用して授業を行った。 ・ 重要な用語(単語)は、OHPを用いて示すようにした。
授業の進め方について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 手話を同時使用し、リアルタイムに情報保障をした。 ・ メモを取る時間と説明する時間を分けた。 ・ スライドやレジュメを読み上げる際には、その旨を伝えた。 ・ 毎回の講義内容を原稿化して渡した。 ・ 他の学生が発表する時には、前に出て板書してもらった。 ・ 配付資料を見たり、書き込む時間を取るようにした。 ・ 大切な事柄を板書するようにした。
支援機器の活用	<ul style="list-style-type: none"> ・ グループ学習の発表の際に、1人ずつFMマイクを使って発表してもらうようにした。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ PCテイクだけに頼らず、直接筆談での説明、確認を行った。 ・ グループディスカッションの際に、テイカーが声を拾いやすいように、机の位置を配慮した。
共通	
授業の進め方について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 作業の指示ごとに当該学生の様子を注視した。 ・ 知識を得ているかどうかの確認を丁寧に行った。 ・ 毎回、内容や資料は理解できたか、話すスピードは適切だったか等の声かけをして、コミュニケーションを図った。 ・ 丁寧な授業を行うよう心がけた。(2名)

問⑩ 障害のある学生への支援を行うにあたって不安な点について記述してください。

上記について、障害種別にまとめたものを表 3-3 に示す。支援を行うにあたって不安な点として、授業内容を理解できているか、配慮の内容をどの程度担当教員が決めてよいのか、障害に関する授業において本人の障害受容の程度を考慮する必要があるためどの程度の受容ができているのか等が挙げられた。担当教員からの問い合わせを受けた際に障害学生支援センターが配慮事項を詳細に伝えることが求められる。また問⑦に示した通り、障害学生自身が授業担当教員とコミュニケーションを取ることに對して受動的であるため、障害学生が自身の考えや感じ方を伝えることができるよう支援を行う必要性が示唆された。

表 3-3 支援を行うにあたって不安な点

視覚障害	
	<ul style="list-style-type: none"> ・拡大印刷の資料を渡す際、学生の座席指定をしていなかったため、当該学生を探すのに時間がかかった。 ・座席を指定すべきか、本人がどのように感じているか不安に思った。
聴覚障害	
	<ul style="list-style-type: none"> ・テイカーが配置されていたが、説明や指導が他の学生と同じレベルで伝わっていたか不安だった。 ・聞き取れていたか、理解できていたか不安だったため、声かけを毎行行った。
肢体不自由	
バリアフリー面について	<ul style="list-style-type: none"> ・教棟間の移動など、物理的バリアが解消されていない。
病弱・虚弱	
障害の状態について	<ul style="list-style-type: none"> ・外見から障害のあることがわかりにくいと対応する際に難しい。
発達障害	
	<ul style="list-style-type: none"> ・発達障害のある学生の支援が難しいと思われ、今後の課題だと思う。
精神障害	
	<ul style="list-style-type: none"> ・非常勤講師であると精神障害の学生の場合の配慮について、どの程度まで出席等を考慮できるのかといった判断が難しいと思った（補講等が行えないため）。
共通	
	<ul style="list-style-type: none"> ・配慮の程度をどの程度まで担当教員が決めてよいのか分からない（支援センターから指示があり助かった）。（2名） ・教員には学生の症状が実感できないこと。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生が授業を理解しているかどうか分らなかった。(3名) ・ 一般学生や教職員が障害学生の支援に対する気づきがあるかどうか気になる。 ・ 一般学生と一緒に授業についていけないのではないかと危惧することもあった。 ・ 授業内容(障害受容等)について、本人が受け入れられているか ・ コミュニケーションが取れており、時間外でも対応できた。 ・ 障害学生支援センターで適切に指導・助言をしてくれて不安はなかった。
--	---

問⑪ その他、障害のある学生への支援全般について、ご意見・ご提案等自由に記述してください。

自由記述の内容をまとめたものを表 3-4 に示す。「座席指定について、本人の意思を確認して配慮依頼文書に明記してほしい」、「配慮依頼文書の文中にある病名や症状などの専門用語は略さずに正式名称で明記してほしい」、「拡大資料の受け渡しについて、当日に簡単にできるとありがたい」というような配慮依頼文書の内容や障害学生支援センターで行う支援活動への要望や「施設や生活上でバリアと感じられる点を募集し、対策を考えるようにしたらどうか」、「授業の前に、他の学生が入ってこない時間を取って障害学生と配慮事項について話ができるように全学的に決めてもらえるとよい」というような設備・制度上の提案等が挙げられた。このような実際に学生に対して授業を行っている教員等の意見を参考にしながら、障害学生支援センターとしての活動内容の検討、組織・体制づくりを行っていきたいと考える。

表 3-4 支援全般について

支援方法について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 座席指定について、本人の意思を確認して配慮依頼文書に明記してほしい。 ・ 拡大資料の受け渡しについて、当日に簡単にできるとありがたい。 ・ 来年度以降はグループ学習の際に活用できそうな支援機器を使ってみようと思う。
授業の進め方について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今後の反省材料にするため、PC テイクのデータを譲ってほしい。 ・ 大きな影響があったわけではないが、クラス全体の授業進行を変更することがあった。 ・ ゆっくり話すつもりが、だんだんと早口になってしまうことがたびたびあった。

施設面について	<ul style="list-style-type: none"> ・施設や生活上でバリアと感じられる点を募集し、対策を考えるようにしたらどうか。
情報共有について	<ul style="list-style-type: none"> ・配慮依頼文書の文中にある病名や症状などの専門用語は略さずに正式名称で明記してほしい。
障害理解・認識、研修について	<ul style="list-style-type: none"> ・障害学生がいる場合の講義方法の講習会等を検討してほしい。
コミュニケーションについて	<ul style="list-style-type: none"> ・授業前に、学生に必要な支援について直接話して考えたい。 ・授業の前に他の学生が入ってこない時間を取って障害学生と配慮事項について話ができるように全学的に決めてもらえるとよい。
支援体制について	<ul style="list-style-type: none"> ・PC テイクをする学生がいてくれて助かった。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・障害のある学生が現場に立つことを支え、応援したいと思う。 ・支援学生は来ているものの障害学生が遅刻・欠席することがあり、支援学生が気の毒なことがあった。 ・聴覚障害、視覚障害の学生が同じ時間の講義を受講することに驚いたが、学生が優秀できちんと講義に臨んでいたので安心した。